

知求会ニュース

2025年12月

第96号

◎ 訃報 高井孝美さん（国際社会研究専攻 第6期修了生）が本年9月15日に、くも膜下出血にて、享年69歳で永眠されました。ここに謹んでお悔やみ申し上げます。

◎ 博士後期課程 博士号取得、おめでとうございます！

サンジーワ、ポルガハゲダラ ドン プブダラさん（地博第19号）が、2025（令和7）年3月25日(火曜日)に授与された尾立さんに続いて、2025（令和7）年9月30日(火曜日)に博士(国際学)の学位を授与されました。論文名は『なぜ多くの零細企業は零細企業のままなのか？企業業績における収益性と起業家精神の相互作用とオーナー経営者の認識』です。

これまでの国際学部・国際学研究科（修士課程および博士前期課程）・地域創生科学研究所（博士後期課程）出身者の学位取得者は、博士(国際文化)（東北大学）2名・博士(文学)（名古屋大学）/（筑波大学）/（東北大学）4名・博士(人文科学)（お茶の水女子大学）1名・博士(人文学)（パリ東大学）1名・博士(芸術学)（筑波大学）1名・博士(社会学)(一橋大学)2名・博士(農学)（東京農工大学連合大学院）2名・博士(国際学)(宇都宮大学)27名・博士(経済学)（名古屋市立大学）1名・博士(観光経営学)（慶熙大学校）1名・博士(人間・環境学)(京都大学)1名・博士(学術)（杏林大学）/（筑波大学）/（東京大学）/（一橋大学）/（法政大学）/（三重大学）/（宇都宮大学）11名・博士(国際開発学)（名古屋大学）1名・博士(国際関係・紛争・平和学)(キングス・カレッジ・ロンドン)1名・博士(経営学))(立命館大学)1名・博士(医学)(自治医科大学)1名の計59名です（2025年12月15日現在）

◎ 掲載記事紹介

1. 下野新聞（令和7年8月29日）24面に、「佐野のNPO-EOL「未来変えよう」「脱炭素推進3者タッグ」「10月からラジオで発信」と題して、[高橋若菜](#)研究室の記事が掲載されました。
2. 下野新聞（令和7年9月3日）18面に、「平和のかたち・とちぎ戦後80年」コーナーにおいて「中国残留邦人と戦後開拓史学ぶ」「那須歴史探訪館がシンポ」と題して、[神山英子](#)さん(国際学研究科国際社会研究専攻 第7期修了生)の記事が掲載されました。
3. 下野新聞（令和7年9月10日）20面に、「姉妹都市50周年記念事業多彩に」「下野と独・ディーツヘルツタール」「ビール祭り、講演会も」と題して[橋本孝](#)先生(宇都宮大学名誉教授)の記事が掲載されました。
4. 下野新聞（令和7年9月13日）22面に、「夜間中学理解へ きょう映画上映」「28日はシンポジウム」と題して、とちぎに夜間中学をつくり育てる会代表の[田巻松雄](#)先生の記事が掲載されました。

5. 每日新聞（令和7年9月27日）23面に、「脱酸素実現へ情報発信」「佐野のNPO、宇大教授ら」「FMやSNS活用」「CFで資金」と題して、[高橋若菜](#)研究室の記事が掲載されました。

6. 下野新聞（令和7年10月4日）20面に、「夜間中学 意義考える」「栃木でシンポ」「市民団体など議論」と題して、とちぎに夜間中学をつくり育てる会代表の[田巻松雄](#)先生のコメントが掲載されました。

7. 下野新聞（令和7年11月7日）5面に、「夜間中学運営など最優秀」「輝くとちぎづくり表彰式」「宇都宮」と題して、とちぎに夜間中学をつくり育てる会代表の[田巻松雄](#)先生のコメントが掲載されました。

8. 下野新聞（令和7年12月6日）3面に、「地域防災力の強化目指して」「宇大でシンポ」「研究発表や講演」と題して、留学生・国際交流センターの[飯塚明子](#)先生の記事が掲載されました。

9. UU now No.61 (2025 AUTUMN) 4頁に、「Utsunomiya University News」紙面で「日本の大学として初！学生チームがニュルンベルク模擬裁判大会本戦に出場」と題して、地域創生科学研究科の[Hagiya Corred Magda Yukari](#)さん、国際学部の[花塚ひとみ](#)さん、[鈴木望夢](#)さん、[横井春香](#)さん、[吉田桜華](#)さんらの記事が掲載されました。

特別寄稿 高井孝美さんの追悼文を修士論文指導教員の[北島滋](#)先生にお願いしました。

「高井孝美さんの訃報に接して」

北島 滋

11月3日に知球会の土屋さんから思いがけぬ知らせが飛び込んできました。それは高井孝美さんご逝去の悲しい知らせでした。

高井さんとは＜妙な縁＞でお付き合いが始まりました。高井さんは国際学研究科国際交流研究専攻へ2004年4月に社会人資格で入学してきました。その時の指導教員は私ではなく他の教員でした。その経緯を推察するに、高井さんの研究したいことを当時の面接した教員が十分精査しなかったことにあったのだと思います。高井さんは自分の研究したこととその教員の専門分野が異なったことから、随分と悩み退学を決意したところを同期の友人たち（その一人が既に鬼籍に入られた岡本義輝さんだったと後日、高井さんからお聞きしましたが）から指導教員を変えて研究を続けるよう説得されたとのことです。この顛末は、＜地域と市民活動＞の研究をしていた北島のところで修論を書くことになった、というしだいです。したがって師弟関係はわずか1年でしたが、その＜妙な縁＞で今日まで師弟関係とは別に友人としてのお付き合いをさせていただきました。

高井孝美さんは修士論文として、『新・日光市における国際観光振興と国際交流の役割—日光国際交流協会の活動を事例に—』を2006年1月に提出しました。＜新＞がついているのは1999年に日光市と今市市・藤原町・足尾町・栗山村が合併して＜新日光市＞が誕生し

たからです。日光市から毎週車を飛ばし熱心にゼミ活動に参加し、他方で修論執筆に集中していました。論文指導をしている過程で驚いたのは、日光市の国際観光における国際交流協会の活動の分析もさることながら、日光市が＜宗教とそれが醸し出す宗教的雰囲気をたたえた街＞であることを見事に摘出し論文で余すところなく示したことです。1999年日光市は世界遺産（2社1寺）に指定されていましたから、何を今さらと言う方がいるかもしれません。実は北島とゼミ生たちは1999年に『世界遺産都市日光における産業・地域構造の変動』という調査論文を発表していました。この論文で日光市が古河電気工業の企業城下町であることを明らかにしましたが、他方で宗教の街であることの分析は残念ながら取り残した課題でした。宗教界における祭事の持つ意味、祭事の進め方、位階とその役割等の理解は困難をきたしたからです。したがって高井さんの論文は北島にとってまさに＜目から鱗＞でした。

日光市が＜宗教とそれが醸し出す宗教的雰囲気をたたえた街＞であることを明らかにし得たのは、高井さんが創業200年（文化2年、1805年）にもなる家業である高井屋の若女将であったことにもあります。高井屋は2社1寺の祭事の時に食事等関わる全てを司ることを生業としてきました。高井さんは先代の女将からしきたりを厳しく仕込まれたのだと思います。女将さんは厳しさの中に優しさと品格を備え方だと記憶しています。それらが修士論文にみごとに体現されたのだと思います。

まだ69歳という若さで旅立たれました。生前にもう一度お会いして食事をしながら楽しくお話をと悔やまれますが、今となってはただご冥福を祈るばかりです。

（2025年11月10日原稿受理）

研究室訪問 64 第9号から国際学研究科に関する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

「大きな主語の外にあるもの」

宇都宮大学国際学部助教 梁 鎮輝

昨年度10月より国際学部に着任して、1年半ほどになりました。何に忙しかったのかもよくわからぬまま、駆け抜けた感じがしました。自分の古巣とはいえ、国際学部は国際社会学科と国際文化学科が統一に、そして国際学研究科もなくなり、新たな大学院の形になっていたなど、日々の変化に着いていくだけで精一杯です。

4年生のゼミ生や院生の指導をまだ担当していないため、研究室を持っている実感がないに等しいのですが、ようやく、今年の後期から卒業準備演習を選んでくれた二人の学生がいます。ひとりは中国の宋代における文化と社会、もうひとりは現代日本における中国文化による影響の変容について興味があるようです。私自身は近代における日本と中国の思想・文化を研究対象にしています。西洋文明を取り入れつつ、これまでの「伝統」を解体し、再構築していく過程において、当時の知識人や文人たちがどのような議論を行い、

各々の「近代」を目指したのかについて研究しています。博士論文においては、思想交流史の枠組みにおいて近代中国による日本ないしは東アジアへの照射の実態について究明し、幸田露伴という知識人に焦点を当て、宗教・文学・政治などの領域における近代中国知識人による影響の一侧面を明らかにすることことができました。

国際学部はこのようなテーマの開きがある教員や学生同士が同じ研究室に所属することができます。個人的にはそれが国際学部らしいところであり、そしてそのような交わり自分が両者にとって一つの学びになるとも思っています。

私は国際学部で主に「中国語専門基礎」、「中国語講読」、「中国語会話」、「外国語臨地演習（中国語）」、「中国文化論」などの授業を担当しています。

中国語関連科目について逐一の紹介は省きますが、私の語学のスタンスとして寺子屋の素読のように声を出して暗記することを重要視しています。毎回の授業では単語テスト、本文の朗読や暗記などを欠かさずに行います。

「中国文化論」という授業は近現代中国文化を理解するための前提となる視野及び能力を養うことを主な目的としています。近代化・国民国家化・グローバル化などの変革が進んだ清末から中華人民共和国成立までの時期を取り上げ、政治・経済・教育・文学・美術などの分野において様々な知識人が日本を通じて西洋文化を如何に獲得し、近代化に寄与する形で古典の取捨選択を図ろうとしていたのか、代表的な人物の思想形成に関するケーススタディーや民衆社会への浸透の実態と共に学生たちと議論していきたいと思います。

「中国」というものの持つ多様性を示し、常に変化する現代中国に触れた際に感情的、短絡的に物事を判断してしまうのではなく、そのような文化現象が如何に発生し、如何に定着したのかというプロセスやメカニズムを学生たちと柔軟に考えていきます。

ある国や地域の文化を理解することとは、単に表面的な事態に視線を注ぐだけでなく、その精神的基盤を歴史的に掘り下げる必要があります。私たちは何かについて語る時に、「中国文化とは何か」、「日本文化とは何か」、「中国人はこうである」、「日本人はこうである」などのように、ついで大きな「主語」を使いがちです。しかし、大きな「主語」の境外に置かれている事物や人間は必ず存在することを忘れてはいけません。それらの存在への注視や関心はこれまで発見できない世界へと導いてくれるはずです。

日本社会で「排外主義」が広がりつつある昨今の状況下でこそ、われわれ国際学部の学生や教員たちこそ大きな主語によって「排除されるもの」の歴史についてしっかりとと考え、理性のある行動を持って、国際学部の掲げる多文化共生という理念を守っていかなければなりません。

今後も私の研究室の門を敲く学生たちと共に、国際学部での四年間の学びを自身の興味関心に沿ってまとめ上げができるのかを考えていきたいと思います。

(2025年12月08日原稿受理)

博士録 69 第 22 号から国際学部、国際学研究科に関する同窓生に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

**「中国の大学における日本語母語話者教師と
非母語話者教師による協働について
—日本語非母語話者教師の視点から—」**

李 雪珍

【論文要旨】

本論文は、中国の大学における日本語教育現場における日本語非母語話者教師(Non-Native Teacher 以下、NNT)と日本語母語話者教師(Native Teacher、以下、NT)との協働をテーマとして取り上げ、NNT を対象としたアンケート調査および半構造化インタビューの結果にもとづき、その実態を分析するとともに理想的な在り方を論じた研究である。ここでの問題意識は、中国の大学の日本語教育現場に制度的な変化が多く生じている現在、その場を共通の仕事場とする NT と NNT 間の協働の実態を不明なままにすべきでないと考えたこと、教師を取り巻く新しい教育機関の制度的環境が生じている今、NT と NNT 間の協働が新たな課題となり得るということであった。

本研究の特徴は、NNT の側を中心に質的研究の分析手法を用いて調査し、必ずしも当事者の発言や回答の表層に表れない事項までを明らかにすることを試みる点である。SCAT 法(Steps for Coding and Theorization)により、実際の協働の特徴や、その中でどのような利点と課題が生じているかについて明らかにしたほか、PAC 分析(Personal Attitude Construct=個人別態度構造)によるインタビュー調査にもとづき、NTT にとっての理想的な協働の形について考察した。さらに、分析結果をもとに、今後の中国の NT と NNT の協働現場で実現すべきことを提言した。

分析の結果、協働を経験した教師は「授業」「研究」「課外活動」の 3 領域で NT と連携していることが明らかとなった。利点としては、①学生にとってより良い授業の提供が可能となること、②NT と NNT 間の理解や情報共有が促進されること、の 2 点が確認された。一方で、教師の負担増大や立場の差異による問題の発生に留意し、衝突を回避しようとする傾向が課題として浮かび上がった。

さらに、理想的な協働の在り方としては、①明確な役割分担、②協働しやすい職場環境、③異文化理解と尊重、④教師の資質向上、⑤協働相手と共に成長する、という 5 つの要素が抽出された。理想的な協働では、まず協働内容の範囲を明確にし、各教師が自身の強みを活かせる役割分担を行うことが重要である。その上で、協働しやすい職場環境を整備し、互いの専門性を尊重しながら発揮することが求められる。さらに、異文化理解と尊重を基盤とし、教師の資質向上を図ることで、円滑な協働と持続可能な教育環境の実現を目指すことができる。

最後に、理想的な協働を実現するための具体的提言として、①協働制度の構築、②良好な協働環境の整備、③実践的なカリキュラムチームの形成、④多様性を活かした研究チームの構築、という 4 点を提示した。

【後輩に向けた助言・メッセージ】

これから論文を書いていく皆さんへ、私の経験からいくつか伝えたいことがあります。少しでも役に立てば嬉しいです。

まず大切なのは、できるだけ早い段階で課題をはっきりさせて調査に取りかかることです。どんな対象者を選ぶのか、どの方法が適しているのか、どれくらいの調査が必要なのかを最初に考えておくと、その後が進めやすくなります。調査は時間がかかるうえ、思わずトラブルも起こりやすいので、余裕を持って計画してください。私自身、海外の対象者にインタビューを行ったのですが、相手の選定やスケジュール調整にかなりの時間を取ら

れました。早めに動いておいて本当に良かったと思います。最初は「何をどう進めればいいのか」と迷うこともあると思いますが、小さくパイロット調査をしてみると、だんだん研究の方向性が見えてきます。

次に、悩んだときは一人で抱え込まないことです。指導教員や研究室の仲間に相談すれば、思いもよらない視点やヒントをもらえることがあります。発表会や面談などの機会を活用して、異なる分野の人にも自分の研究を話してみると、さらに新しい気づきが得られると思います。

また、博士課程に入ったら早めに執筆の計画を立てておくと安心です。最初はざっくりとした計画でも構いません。毎年少しづつ見直して、「今年はどこまでできたか」を振り返ってみてください。できたときは自分を褒め、できなかつたときは「なぜ止まったのか」「どうすれば前に進めるか」を考えます。それを繰り返すことで、達成感も反省も次につながっていきます。

そして最後に大事なのは、心と体の健康です。執筆の途中で焦ったり、不安になったり、自分の力を疑ってしまうこともあるかもしれません。そんなときは一度手を止めてリフレッシュしてみてください。気持ちを切り替えて少しでも書き進めれば、形は少しづつ整っていきます。誰だって最初から完璧な論文は書けません。直しながら、だんだん良くしていけば大丈夫です。むしろ、その過程を通じて自分を理解し、コントロールする力がついていくはずです。

最後になりますが、これから博士論文を執筆する皆さんのお健闘を心から願っています。

(地域創生科学研究科 博士後期課程 先端融合科学専攻

グローバル地域デザインプログラム 修了)

(2025年8月19日原稿受理)

知究人 37 第9号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうびと)を設けました。

海外だより 35 第27号から国際学研究科、国際学部出身の海外在住者からの寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

海外留学今昔 32 第35号から国際学部出身者および在学者を中心とした海外留学体験の寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**海外留学経験者**および**海外留学中の在学者の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

学生サロン 24 知求会ニュース第41号より現役学部生・院生によるコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**現役学部生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

キャリア指南 15 現役学部生に向けた企画として、宇都宮大学全学部から国際機関をはじめ、NGO・NPOや企業などで活躍する先輩方に執筆していただくコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**キャリア指南にふさわしい卒業生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

フォーラム 2025 年の長月を迎えて、皆様慌しいことと思います。(原稿集めに苦労しています。)

「語り部」として戦後 80 年という節目の年に全国戦没者追悼式に参列して」 神山 英子

2025 年 8 月 15 日の終戦記念日に全国戦没者追悼式に参列しました。日本武道館で開催された追悼式では、天皇皇后両陛下や首相ら各界の要人と遺族ら計 4,523 人の参列で、厚生労働省によると、戦後生まれが 53.2% と初めて半数を超えたということでした。

当日は宇都宮から出発し、地下鉄九段下の駅から照り付ける日差しの中、列をなしながら歩き、会場に近づくにつれて感じる物々しい雰囲気に緊張しながら、荷物チェックを受けて受付を済まし、係の方に胸に花をつけていただいて、武道館内へ入りました。

オーケストラの音合わせに緊張感が和らぎ、語り部仲間（同じ研修を受けた語り部の仲間）と開始時間を持ちました。いよいよ 11:51 より始まり、追悼式は、天皇皇后両陛下御臨席、国歌斉唱、式辞（内閣総理大臣）、黙とう、天皇陛下のおことば、追悼の辞（衆議院議長、参議院議長、最高裁判所長官、遺族代表）、天皇皇后両陛下御退席、献花、閉式という流れでした。中でも、父親を亡くした 82 歳の遺族代表の方の追悼の辞が印象に残っています。朝鮮で終戦を迎え、帰国を急ぐあまり飛び乗った引き揚げ船が、朝鮮海峡において機雷に接触、沈没したことでのこと。そして今なお、侵略や民族紛争などで、多くの人々が犠牲となっていることを挙げ、「平和の語り部事業」などを通じて、平和のありがたさ、戦いの悲惨さを後世に継承する誓いがありました。

私自身、首都圏中国帰国者支援・交流センターの戦後世代の語り部事業で 3 年間の研修を受け、語り部となったご縁で、今回、全国戦没者追悼式への参列が叶いました。その前の 2018 年の研修生時代にも 1 度、参列したことがあります。故安倍晋三元内閣総理大臣からの自宅に届いた追悼式への案内状には、身が引き締まる思いでした。いずれも私にとって忘れない貴重な経験でした。

2020 年から語り部活動をしており、今年で 5 年になります。その間、栃木県以外にも、北海道、東京、京都、大阪、奈良、高知とさまざまなところへ赴き、語り続けてきました。少しづつ自信がついてきた一方で、聴衆の方々からいただくコメントに思わず涙を流すこともあります。中国残留邦人に日本語を教えているときに現地での労苦や永住帰国後の労苦を聞き、本人の希望もあって、「聞いたからには伝えなければ」という思いで続けています。戦後世代の語り部ができるることは限られていますが、できることをこれからも続けていきたいと思っています。

（国際学研究科国際社会研究専攻 第 7 期修了生）

（2025 年 11 月 28 日原稿受理）

東南アジア支部だより

第 63 号から、タイ在住の大畠美優紀さん（国際学部社会学科第 1 期生・国際学研究科国際社会研究専攻第 1 期生）が発起人となり、国際学部同窓会および大学院国際学研究科同窓会の東南アジア支部としてニュースレターを創刊しました。2019 年 4 月から、年 4 回から年 2 回発行（4 月 1 日、9 月 1 日）の変更になりました。

EU 支部だより

知求会ニュース第 38 号からイタリア在住の松原真実子さんによる知求会 EU 支部「Newsreel World」を発行してきました。今回の「Newsreel World」56 号の内容は、
1. イタリア 日本版メローニ サナエ・タカイチ 2. EU 支部だより 一ガラスの天井を破った女性一です。

編集者ひとりごと

●日光市の名店「高井屋」の女将・高井孝美さんの訃報は、本当に残念でなりません。高井さんとの出会いは、OB として助言者役となり、修士論文の発表会準備（院生控え室）の席だったと記憶しています。

●本年 10 月 25 日・26 日に、放送大学群馬学習センター主催の面接授業に参加してきました。長年、抽選で落選続きにより参加できていない講座でした。それは、「群馬の考古学」シリーズです。今回の講座は 11 回目とのことで、一巡したようです。総社歴史資料館や古墳群には足を運んでいましたが、石室までは入ることはしていませんでした。今回は専門家の案内だったので、多くの気づきがありました。またホテルに 2 泊し、馴染みの居酒屋再訪ができ、さらに新たな居酒屋との出会いもあり、参加した甲斐がありました。私自身は県外の学習センター主催の面接授業参加は初めてでした。しかし、今後は積極的に、計画的に、参加していきたいと思います。

●来年の年賀状デザインのため、10 月 10 日・11 日に水戸市を訪問しました。文化施設、城跡、居酒屋などを訪問し、その写真を撮影するためです。11 日は生憎の雨模様で、歩くのに難儀しましたが、茨城県近代美術館、水戸城跡、水戸芸術館などを巡りました。今度は、日本三名園の 1 つである「偕楽園」を、梅まつりの時期に再訪する予定です

さて、知求会ニュースも、無事 24 年目を配信することができました。これまでの原稿執筆者の皆様、本当にありがとうございます。Season's Greetings！ 皆様、よいお年をお迎え下さい。

編集後記：2010 年 4 月 26 日から 知求会ニュースのバックナンバーは 国際学部同窓会 HP (<http://www.afis.jp>) で見られるようになっています。

同窓会会員の皆様へのお願い：住所、勤務先および携帯電話番号、メールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。chikyukai@gmail.com
